

## 「ヒューマニズム」を超える思考と行為 ハイデガーとアーレント

田端健人（宮城教育大学）

ハイデガーによるヒューマニズム批判は、「14、15世紀イタリア・ルネサンス」や「18世紀ヒューマニズム」への批判であり（vgl., GA: 320）、「人間精神の復興」（Comenius: 10）をめざす近代公教育への批判にもなる。また、「すべての存在者が労働の素材として現れる」（GA9: 340）唯物論も、サルトルも、ヒューマニズムに他ならない。これら多様な形態のヒューマニズムの本質は、「主観性の支配」から発生する「あらゆるものの無制約的な対象化」（GA9: 317）であり、その足下に巢食うのは、「近代的人間の故郷喪失」である。ヒューマニズムへのハイデガーの対抗は、「ホマー・フーマーヌスのフーマーニタースを思考する」（GA9: 352）ことであり、ヒューマニズムとは「別の様々な視界を開き」（GA9: 348）、人間としての人間のフーマーニタースに、新たな尊厳を与える挑戦である。それは、ヒューマニズムの表向きの人間礼賛と生産性に隠れた破壊性の暴露と回避を企図している。

ヒューマニズムを克服するのは、「存在の思考」である。この思考は、現実には何ら作用を及ぼさないものの、存在に聞き従いそれを言葉にする「最高の行為」である（vgl., GA9: 313）。こうした行為としての存在の思考は、近代に猛威をふるう「支配と統治」の「代わりとなるもの」（LM2: 178）である。その支配と統治とは、すなわち、「テクノロジーのまさしく本性」であり、「意志する意志」、「世界全体をその支配と統治へと隷属させる（subject）意志」であり、「その自然な結末は、全面的な破壊でしかありえない」（LM2: 178）。

本発表では、ヒューマニズムとテクノロジーに対するハイデガーの対抗の道を、アーレントの行為論から見直し、存在の思考とは異なる新たな対抗的視界を提示したい。

存在の思考で行為しているのが誰かと問うことで、アーレントは存在の思考に新たな光を投じる。その思考は確かに行為であり、行為するのは思考者であるが、この思考者が存在に従っている以上、真に行為しているのは存在、つまり「誰もいない（Nobody）」（LM2: 187）。それゆえ、存在の思考では、行為は三次元に分化する。現れの世界での複数の人々の行為、思考者による存在に聞き従う行為、誰もいない存在の行為である。

アーレントもまた、近代において露呈しはじめた全面的な破壊を危惧し、それへの対抗を考えるが、彼女はハイデガーとは正反対の方向に望みをかける。

第一に、ハイデガーが、現れの世界で行為する人々の背後で行為する存在に救いを見出したのに対して、アーレントは、現れの世界における人々の行為に活路を見出そうとする。第二に、ハイデガーが、存在の声に聞き従う孤独な思考者に、世界の運命を託したのに対し、アーレントは、共通の現れの世界で相互に語り行為する複数の人々を頼みとする。第三に、危機から救うものが、ハイデガーでは誰もいないのに対し、アーレントでは、公的な活動と言論において自分が誰かを明かす人々、それぞれにかけがえのないユニークさをもつ斯く斯く然々の者たちである。第四に、両者とも救いの拠点を光の領域に求めるが、ハイデガーにとってその領域は、現出する存在者とは存在論的に区別された存在の明るみであるのに対し、アーレントにとっては、複数の人々によって見られ聞かれる輝かしい現れの世界である。そして第五に、ハイデガーの場合、光と闇はやがて交錯や反転を繰り返す

るようになるが、アーレントは、公的な光の領域と私的な闇の領域との間に一線を画し、人々が一線を越えないことを求める。

アーレントが可能性を見出すのは、公的な場での言論と活動で涵養され発揮される「判断力」である。これは、意志とも思考とも異なる天与の精神力である (cf., LM1: 69)。判断は、カントが洞察したように、「趣味 (taste; 味覚) のセンス」(LK: 64) に基礎づけられている。常識からすると、美醜や味覚など趣味判断は主観的と思われるため、アーレントもまたヒューマニズムに舞い戻ったかに見えるが、実は、趣味は議論でき、涵養でき、合意を形成できる「間主観的」な「共通感覚」である (cf., LK: 76, 71)。主観的な判断から共通感覚としての判断へと涵養されるためには、「利害関心」と「党派性」から解放され、あらゆる人々の立場を考慮できるようになる必要がある (cf., LK: 68, 73)。

本発表では、この趣味判断の領域を、真理と美、芸術と文化、天才と住民、哲学と政治が交叉する問題圏として検討し、近代的人間の故郷喪失を超えるアーレントの方途を、ハイデガーと対照させつつ示したい。

#### 引用文献

- Arendt, H. 1969: *Crises of the Republic*, Harcourt Bracew & Company. [CR]
- Arendt, H. 1978: *The Life of the Mind, One / Thinking, Two / Willing*, One-volume Edition, A Harvest Book. [LM1] / [LM2]
- Arendt, H. 1992: *Lectures on Kant's Political Philosophy*, edited and with an interpretive essay by Ronald Beiner, The University of Chicago Press. [LK]
- Comenius, J. A. 1960: *Pampaedia*, Lateinischer Text und deutschen Übersetzung, Quelle & Meyer, Heidelberg.
- Heidegger, M. 1976: *Wegmarken*, Gesamtausgabe Band 9, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main. [GA9]